

「サイクリング」を始めて

佐藤恭輔

東京へ出てきて、一人暮らしを始めて思ったことは、だれもが思う、寂しいということであつた。学校へ行つても、今まで一度も見たことのないあまりかっこいいとはいえない男の人たちばかりであつた。色気のない学校が、これはとまでに味気ないとは思つてゐなかつた。アパートへ帰れば、一人きり。冬でも、電燈を点しては暗すぎるのである。こんな中で暮らしていたら、いつかは、ノイローゼになるんじゃないかと思ひ、適当であると思われたのが、「サイクリング部」であつた。四十三歩」が目印のサイクリング部であつた。

サイクリング部のドアをたたいての第一印象は、

部についてのお心暖まる説明には感心した。

たつた一人のほかに、写真集とか、部誌などを見せてくれた。部自体は、かなり純粋がとれているんだらうと思つた。サイクリングを知らないほくても、その楽しさがなんとなく感じられるような気がした。

新歓ランは、ただ走ることに精一杯で、あんなに尻のいたいものたとは思つてゐなかつた。自転車で九十キロメートルも走つたことになかつたほくには、九十キロメートル走つたんだと地図をながめると、十分な精進感を得られた。部室でのビールもつまみもあつた。つまみが少々たうなかつたが、

新歓ランが、走るということのおもしろ

「さ、教えてくれたことしたら、予備合宿は、みんなて、走る楽しさと、自然の持つ魅力のすばらしさを教えたくれた。キャンプして、ごはんを作ったり、シユラフの中で寝たりしたのは、初めての体験であった。苦しいながらも初めて立つかすんだ峠、朝日の中で見る静かな湖、これが、人を旅に憑かれやすかったのであろうと思った。北海道へ行けなかったのは残念であった。写真で見ただけでも、すばらしい景色である。秋休みに行った伊豆半島もすばらしい景色であった。南伊豆は、一、二年前にマトガレットラインが完成したばかりで、また公害などとは、緑濃い、海の青さといひ、松やみかんの木の美しさといひ心を打たれるものばかりであった。又、初めて泊った、ユースホステルや、心暖まる歓迎をうけた民宿も、大きな笑いの一つであつたらう。伊豆半島周りは、曾我

部君と行ったのであるが、初めての地図を見ながら立てた計画は、ひじょうに苦勞した。また、はつきりした距離感がないため、百キロとはどのくらいなのか、峠の十キロとはどのくらいで時間的にどうなのであろうというところが、わからず悩んだ。事実、二日目、ある程度は予想していたものの、道路の起伏の激しさのため、当初、計画していた道のりを走行できなかつた。計画のむつかしさを痛感したのである。

サイクリングは、白ごうの運動不足を解消するためにも、新しい自己を見つめるために、手ごうに楽しめるスポーツである。できる限りサイクリングを続けていきたい。